

〔早稲田大学大学史セミナー拡大版シンポジウム「新しくみえてきた早稲田の歴史——『百五十年史』編纂過程の成果と課題』〕

よりよき『百五十年史』のために

寺 崎 昌 男

ご紹介いただきました寺崎であります。いろいろな大学で働かせてもらったのですが、その働きの半分ぐらいいは沿革史を作るといふ仕事でした。今日は「最後にコメントをしてほしい」と依頼されたのですが、それは多分、「おじいちゃんの一言が欲しい」ということでしょう。意見をまじえて、なるべく手短に申し上げたいと思います。「よりよき『百五十年史』のために」と題したレジュメに沿ってお話いたします。

レジュメの副題には「経験則に基づいて」と書きました。これまで経験した事柄は確かに個人的なものです。その中で得たことの中には、一般的・普遍的な部分もあります。そのような意味での経験をしてみると、いろいろな例を、体感も交えながらお伝えすることができます。

先ほど湯川先生がご紹介して下さいましたが、大学の沿革史というのは、単なる履歴書ではなく、履歴書を書いていくプロセスの中にその大学のトータルな実力が表れる、そういう怖い作品だ、というのが、私の最終的な印象であります。つまり沿革史編集はあだおろそかにはできない仕事ですが、従来は、多くの場合、「あだおろそかに」

なされてきました。

理由はいろいろありますが、まずは「やっても得にならない仕事」だということがあります。何かの都合や順序で回ってくるようになった場合、仕方なくやらざるを得ない。もし歴史研究者であつたら、自分の歴史研究がその仕事を通じて深まるかという、そうでもない。研究者としては、「余計なことやらされているな」、「おまえは、本当は莊園の研究者ではなかったのか」とか、いろいろ言われながら、順番や義理に迫られてやらざるをえない。多くの場合そういうことになっているわけですね。

ですから、編集作業はなかなかうまく動いていかない。もともと右のような刻印を捺されている作業だからです。そういうことを覚悟したうえで、「やるんだつたら少しでもよくやるように」と心がけなくてはならない、そういうふうに、二重三重にしんどい作業なのです。

もう一つは、内外の個別大学沿革史を読んだり検討したりしておくことをお勧めします。特に外国では、大学沿革史はどういうふうになっているのか。私自身も、これにはたいへん関心がありました。のちにまたちょっと触れたと思います。

最初に述べたいのは、『早稲田大学百五十年史』に対する期待」でございます。

第一に、湯川先生のご報告によると、今度の計画では『百年史』とダブっている部分でもそのまま利用するのではなくリライトすることになっているのですね。私は、これはとてもいい方針だと思います。多くの場合、そうしません。「目の前に百五十年記念の年が迫っている。これまで『百年史』があるんだから、その次の五〇年だけを書きましよう」。こういうふうを考えてしまう大学がいっぱいあるのですけれども、それではいいものではないんですね。

『百年史』をつくった時期から五〇年たった段階では、もはや『百年史』が扱った百年間を見る目は、実は変化しています。ところが『百年史』の記述をそのまま引き継いだり踏まえたりしてしまうと、その変化が盛り込めないことになります。前のものをそのまま受け取るというのでは、いくら後の五〇年をよく書いてあっても限界がある。そういう点で「ダブリ部分リライトの方針」というのはとてもいいことだと思います。

最近、特に近代史、現代史の部分ではいろいろと新しい研究が進んできました。中でも、人物研究、思想史研究は、大いに進展してきました。そういう点で、『百年史』がどうレベルアップされるかは、早稲田の場合、大いに期待されるということです。

二番目は、戦時下の研究が今度の『百五十年史』にどのように書かれるか。これを、やはり期待いたします。

これも非常に研究の進展してきた分野であります。特に、この約二〇年間を見れば、例えば総力戦の研究といったものも進みました。また「十五年戦争」「太平洋戦争」と言っていた戦争を「アジア太平洋戦争」と総称することがほとんど慣例化してまいりました。現代戦争研究や戦時下体制研究も、刻々に進んできているんですね。そういう動向が、今回、新しい百五十年史にどういうふうに取り入れられるだろうか。また勤労動員とか、学徒出陣、卒業生の戦没状況調査等も、今、個別大学で、どんどん進行している研究調査対象です。東大でも、卒業生の中で学徒出陣をしたのは誰で、そのうち戦没したのは誰か、やっと分かってきました。こういった進展中の研究テーマが、百五十年史にどう反映されるか。大いに期待させていただきたいと思います。

三番目は、明治・大正時代のことを、幸い重点的に再検討し深められるようですから、その際、ぜひ早稲田ならではの事情を重視してお書きになったらいいと思います。

例えば、多くの私立大学は、明治二〇年代から三〇年代にかけて、大学拡張運動をやっております。学校の外の学

生と書く「校外生」を拡大しているんですね。今の言葉で言えば通信教育、大学拡張講座を全国的に拡大いたしました。多くの私学の中で東京専門学校・早稲田大学は、特にその事業に熱心でありました。ああいう実績は、早稲田史の大なる特徴なんです。一体どうしてそういうことができたのか。他の大学、今で言えば法政や中央大学、明治もそうですが、どこでも同じように大学拡張運動をやったんですが、その中でも早稲田は、なぜあれほど熱心に乗り出したのか。そういった論点もぜひ考慮して編纂していただきたいと思います。

もう一つは、一九〇〇年代に入ってしばらくすると、留学生を大量に受け入れました。日露戦争後あたりですね。それも、早稲田大学の特徴でした。当時、他の私立大学は、あまりやってないことでした。特に大量の清国留学生を受け入れていました。なぜか。恐らく、先ほど木下先生がお話になった大隈重信の外交問題についての配慮といったものが基本にあったのでしょう。その辺の事情も、力を入れて分析していただけたらいいかと存じます。

次に大正時代に入ると、早稲田大学では職員のエネルギーが相当強かったんじゃないかと想像されます。一番有名なのは、早稲田大学プロテスタント改革運動といわれた、教員と職員との連合組織による大学改革運動でした。その関連資料を商学部にいらつしやった原輝史先生が発掘されました。橘静二という人物が、その音頭を取って、雑誌まで発行したのです。その橘静二は、職員のトップで、非常にユニークな大学論を発表いたしております。そういう例は、他の大学にほとんどありません。そういう形の運動がなぜ起きたか。職員のエネルギーが、いかに、なぜ発揮されたのか。そういうことを見ていただきたいなと希望いたします。

最後は、予科生徒に対する錬成です。戦時下になりますと、「教育」という言葉に代わって「錬成」という言葉が頻用されてまいります。大学専門学校等でも、学生生徒たちを錬成しなければならないということで、予科生に対しては特に厳しい錬成を行なう例が増えました。その時代、早稲田大学は他にあまり例のないぐらい熱心に錬成活動を行

やっております。どうしてだろうか。田中穂積さんという総長が当時指導推進したようですけれども、そういうことは『百年史』ではあまりはつきり書かれておりません。今度はぜひ重視していただきたいと思います。

以上のようなことを見るにつけても思いますのは、これからの大学沿革史の編纂は、自校自身への点検と評価の作業になるだろうということです。その「評価」の部分は、文字通りの自己評価にならざるをえません。今生きている自分たちが、この大学のキャンパスの中で息づきながら、自分たちの大学をどう評価するか。その評価の軸の一つとして、うちの大学の特質を、また独自性を、どこに見いだすかということになると思われます。それこそ、評価の重要な視点だと思うんです。その作業を、ぜひやっていただきたい。

さらに突っ込んで考えますと、独自性というのは、どこに表れるか。

一番目は、「水準」だと思います。研究の水準と教育の水準です。「水準において、この面が極めて高い」とか、「この面が大変低い」とか、そういう事実が現れてくるでしょう。これは、一つの大きいポイントです。

二番目は、先述の「特色」と呼ばれるもの。あるいは、「独自性」といわれるものです。「なぜ、うちだけがそんなことをしたのか」。分かりやすく言えば、そういうポイントですね。これもきわめて大事だと思います。

湯川先生のお話をうかがっていた間にいろいろ思いめぐらせていたんですが、早稲田大学の独自性はどこにあるんだろうか、ということでした。

これは数値化しにくいというか、文字や資料には出てこないんですけれど、外から見ると、何といっても学生相互の感化力、あるいは、男女を問わず学生相互の人間形成力といえますか、それがものすごく強い学校だ、という印象があります。さまざまな若者たちが、この大学に入ってきて、大学の影響というよりはむしろ友人たちの刺激の下で学ぶ。そして後には、文学者同士、ジャーナリスト同士、あるいは、政治家同士、実業家同士でつながりな

がら仕事をして行く。この傾向は、恐らくずっと早くから始まり、育ってきたのではないかと思われます。

私は、東大で勉強をし、院生としても過ごして、それから立教で教えて、一度東大に帰って、また立教に戻った人間ですから東大と立教のことは割によく知っておりますが、その両方とも、学生相互の感化力、人間形成力という点では決して強くありません。特に東大は、その点は非常に弱いと思います。お互いの相互形成力というのは、ほとんどありません。なくて済むんですね。自分一人で頑張っていればそれでやっていける大学です。それから、立教の場合、こちらほどエネルギーが強烈でないというか、それに比べて、こちら早稲田は、学生同士のエネルギー自体が少なくとも歴史的には非常に強いと思います。多くの文学者たちの伝記等々をご覧になると、すぐ分かります。いかに学生相互の形成力、影響力が強いかということです。

私は、それをよく表しているのは、『都の西北』ではじまる早稲田大学の校歌だと思っています。特にあの三番は、私には大変羨ましい章句であります。ここに参加しておられる学生さんなどもよくご存じだと思いますが、「あれ見よかしこの 常磐の森は 心のふるさと われらが母校」。あれから始まる歌詞は、「集り散じて 人は変れど 仰ぐは同じき 理想の光」となっています。ああいう雰囲気は、東大では生まれませんし、歌詞も考えられません。あれは、明らかに学生相互のつながりが実は非常に強い、ということ象徴している歌詞だと思っています。

相馬御風がああ歌詞を作ったところには、もう母校愛というものが育っていたのでしょうか。ともかく歌詞といいリズムといいあまりに素晴らしい校歌なので、あのリズムを壊すために慶應義塾の作ったのが、『若き血』だったといわれます。タン、タン、タン、タンという速いリズムで、何とか『都の西北』を潰したかった。しかし、それは成功しなかったという話を読んだこともあります。真偽のほどは定かではありませんが、私は、そういうエピソード自身の中に、早稲田の独自性が表れているように思います。『百五十年史』の中に、特色・独自性に関わるそう言った話が出

てくれればいいと思います。

次に木下先生のご報告に対する意見を申し上げます。大変地味な、創設メンバーによる客観的記録のことを紹介していただいて、私はとても印象深く拝聴いたしました。

ああいう日記は、まさに物語とオフィシャルな「正史」との間隙を埋めるものだと思います。物語は、ほとんどの場合、「思い出」として語られます。他方、オフィシャルな歴史は、それこそ委員会を作って編まれる「百年史」の形で出てきます。しかしその間を埋める必要が、どうしてもあるんですね。その資料が常に求められておりますし、私など沿革史編纂を長くやってきた間じゅう、非常に欲しいと思います。

例えば、物語と正史との間の資料がいかに有効かということについては、津田梅子の解釈が全部変わってきた周知の事実があります。津田梅子はなぜ女子の英語学習機関をつくろうと思ったか。その疑問に関する従来の考え方、見方が、大庭みな子さんの資料発見によって、がらりと変わりました。大庭さんは、津田梅子の家にあった柳行李に収められていた一連の手紙を読んでみたのです。英語で書かれている手紙だったそうですが、それはアメリカに住んでいたころのホームステイ先の恩師との間の往復書簡でした。それを読む中で、津田英学塾創設の動機が、従来の解釈と全く違うものとして分かってきたわけです。大庭さんが芥川賞を取った小説『津田梅子』の中に、きちんと書かれております。

津田英学塾というのは、決していわゆる英語塾ではなく、「人間の尊厳を知る新しい女性をつくり出すためには、教養として何が必要か」。これに関する津田梅子の苦闘の産物であったことが、非常によく分かります。日記ではありませんが、ああいう書簡こそ学校の歴史を変えていくものであります。

今回の市島日記も、恐らく、そうだと思います。日記の方の解説は進んでいるとおっしゃいました。とてもありが

たいことです。次の筆記の方の解説が一日も早く進むことを祈っております。

東大では市島日記に類するものは、ほとんどございませんでした。初代の総理・加藤弘之の日記は残っていますが、書かれているのは、ほんとに一行か二行ずつ書いてある単なる物覚えでございます。それから、もう一人、哲学者である井上哲次郎の日記も残っておりますけれど、この日記も、本当に日常生活のことしか書いてありません。大学に何があったとか、そういうことはほとんど書いてありません。あと、会津若松出身の物理学者山川健次郎、この人の日記もありますが、それは私どもが編集作業をやっていたところは欠けている部分が非常に多くて、なかなか大学の実情は分からなかったですね。その点では、市島のような重要人物の日記が残っているのは、とても羨ましいことに存じます。

時間もなくなりましたので、最後に、「これからの個別大学沿革史に求められるもの」というテーマで幾つか注文を述べさせていただきますと思います。

一つは、通史部分の叙述は一貫していることが望ましい、という点です。

私は（先ほど写真に出ましたが）『早稲田大学百年史』の紹介を、こちらの『早稲田大学史記要』に頼まれて書いたときに感じたのですが、個別の章の出来具合がいかにバラバラで、そのために全体の一貫性のなさが極めて大きいと感じました。猛烈な差があるんですね。章によつてはびっくりするような立派な章がある。まるで眼前に情景が浮かんでくるように書かれている章があるかと思えば、まわりの章との間がつながっていないと言ったらよいか、それはそれ、これはこれ、という書き方がしてある章もあるわけです。あれではいけないと思います。

実は、そういうことはしばしば起こり得ることで、それを防ぐ方法はたった一つしかありません。それは、偉い先生が、特にお年を召した——自分も年を取っておいて、失礼な言い方ですが——先生が書かれたものにも誰かが手を

入れられる、という余地を、最初から残しておくことです。つまり、編集委員会の編集調整機能というか、きつい言い方をするとう調整権限を、はつきり初めに申し合わせておくこと、それが大事だと思います。東大ではそれを公然と実行しました。

二つは、新人生のリクルート基盤と卒業生の供給先、この二つの歴史的変化を追求していく必要があると思います。つまり大学はどこから学生を受け入れ、どこへ人材を送り出したか。これは、大学の持っている社会的貢献の重要な部分だと思いますが、従来無視されるか軽く扱われてきました。

三番目は、入学試験の歴史を展望することです。先ほど、湯川先生も触れましたけれど、入学試験問題の分析が重要ですね。幸い、早稲田大学の入試問題は、私が見た限り『螢雪時代』のバックナンバー、さらに古くは『受験と学生』のバックナンバー、すなわち旺文社と研究社が出した二つの受験雑誌のバックナンバーに、慶應と並んで、大正中期ごろからのものはほとんど全部載っております。立教は、ほとんど載っていませんでした。官立高等学校（旧制）や専門学校の入試問題は全部載っております。ところが、私学の中では早・慶両大学の予科入試問題や戦後の学部の問題は例外的に必ず載っています。それらをぜひお集めになるのがいいと思います。試験問題の中に、実は、大学の教育意思が端的に表れております。また入試の方式も変化しますし、試験問題の内容も変わってきます。非常に大きい沿革史のポイントです。

最後に申し上げたいのは、沿革史記述は大学で行われた研究の成果やレベルなどに踏み込めないだろうか、という問題です。

振り返ってみると、早稲田大学は、例えば『近代日本の社会科学と早稲田大学』という論文集を、一九五七年（昭和三二）に出しておられます。『日本の近代文芸と早稲田大学』という論文集も同じ一九五七年に出しておられて、

どちらも五〇〇ページを超える立派な本です。それらには「早稲田大学は日本の近代社会科学の発展にどう貢献してきたか」「早稲田の先輩たちは、どのような文芸研究をやり、またどのような文学作品を生み出したか」といったことが収められています。他に例を見ないほどの学問史であります。そういうテーマの片鱗でもいから、『百五十年史』に入れればいいと思います。

特に外国の大学史を見ると、そういうことの書いてない大学史はございません。時間がありませんので具体的な話はカットいたしますけれど、現実に外国の大学人に聞いてみると、「そういうことを入れない大学史は考えられない」と言います。

新しいことを、欲張っていろいろ注文いたしましたけれども、何よりもご奮闘をお祈りいたします。ご清聴ありがとうございました。

※本稿は、二〇一七年一〇月九日に開催された早稲田大学百五十年史編纂委員会・早稲田大学大学史資料センター主催の早稲田大学大学史セミナー拡大版シンポジウム「新しくみえてきた早稲田の歴史——『百五十年史』編纂過程の成果と課題」でのコメントを原稿化したものである。